

わ け 参加してほしい理由がある



新選組と広島・山口両県は深いつながりがあった。第二次長州征討(四境戦争)前夜、近藤勇が2度も広島市中心部に來ていた(慶応元年1865)11月、翌年正月、伊東甲子太郎、武田觀柳(觀柳齋)、山崎丞、吉村貫一郎、尾形俊太郎、芦谷登、新井忠雄、服部武雄、篠原泰之進らを引き連れて、主要人物が多い。

山崎丞・吉村貫一郎は近藤らが帰京したのちとどまり、四境のうち芸州口の戦況を京都に報じている(慶応2年6月、『中山忠能履歴資料』7所収、317〜318頁)。新選組本部が参戦しなかったからといって、第二次長州征討(四境戦争)と無関係であったわけではない。この戦争の結果が大きく幕末政治を変えることを近藤らは見通していたはずである。だから有能な局員を現地特派員として残したのである。

ついに入ることにはかなわなかったけれど、近藤は西国への出発当日、郷党

新選組を広島・山口両県で想う意外性

中村武生



佐藤彦五郎・小島鹿之助・糟谷大作(良循)に長州萩城まで行くつもりと宣言していた慶応元年11月4日付近藤書翰。町田市立自由民権資料館『武相自由民権史料集』第1巻所収、2007年、167〜168頁。

1度目の帰京のち復命した近藤に対して一橋慶喜は、防州山口城(政事堂)にも近づいていないのに力を尽くしたとはいえない、再度行き毛利敬親父子に会ってくるべきだと主張した『会津藩庁記録』、『大日本維新史料稿本』(慶応元年12月22日条所収、東京大学史料編纂所データベース)。近藤の目指すべき場所は広島ではない、山口城であった。

近藤が力を尽くさなかったわけではない、まずは毛利家の窓口である支家吉川家の拠点岩国に入ろうとした。そのため岩国玄関口である新湊まで来たが拒否され、断念した。このときの新湊の近藤の宿舎は塩屋甚左衛門方である『吉川経幹周旋記』第4、223頁。吉川家当主経幹が至近まで来ると休憩場所選ばれる名家である。毛利家世子広封、広島浅野家世子茂勲らも使用している。

全国の新選組史跡を網羅的に取り上げた『新選組史跡事典』は新湊を取り上げながら(西日本編、新人物

往來社、2002年、229頁)、塩屋方の位置の比定を試みなかった。新選組史のなかでは重要視されてこなかったようである。

今回われわれはその地にメスを入れた。朝山さんがその有力候補地を確認している。みなさんをいさなう予定にしている。

そもそも何をしに近藤らは広島に行ったのか。あまり理解されていなかったのではない。京都の治安を維持するため長州・土佐らの浪士を捕縛・殺傷することをその任務だと認識していればそれは無理もない。広島・山口行は説明しにくい。

新選組は剣客集団である前に政治

集団だった、近藤や土方歳三らは政治家だったという理解は最近のトレンドであるが熊本県立美術館『土方歳三資料館×肥後熊本藩展』図録、2024年、近藤らの中国行はそれを認識できる大事なシーンだったのである。

近藤は前掲した佐藤・小島・糟谷宛書翰のなかで、万一のときは土方歳三に自身の「宿願」を「得と申置いた」と記した。ポーズではなく、萩や山口に入った際、長州人に殺害される可能性を想定していたと思われる。実際文久3年(1863)8月、下関での西洋船舶砲撃の責任を問うため派遣された徳川公儀の使者中根一之丞が

長州暴徒に殺害されている。ありえないことではなかった。

近藤が政治家であることは疑いない。土方もそうだとされて違和感をもたれる向きもある。が、土方が政治家としての力量を備えていなければ近藤は自身の「宿願」を託さなかったであろう。伊東甲子太郎あたりを京都に残したであろう。が、それをしなかった。このとき土方が京都に残されたこと、それが彼は政治家であった証左といえる。

さまざまな新選組の見直しを迫る場、それが広島・山口両県だと見込んでいる。

「前哨戦」のねらい 朝山大吾

慶応元年(1865)11月〜12月と、翌年正月〜3月の2回、新選組局長の近藤勇は芸州広島を訪れました。一度目は長州尋問使の永井尚志の従者として赴きました。彼は毛利家本拠へ行くことを志しますがかなわず、岩国新湊までしか行くことができなかったのはこの時のことです。その後近藤は帰京し、12月22日会津家に復命し情勢を報告。その1か月のちに再度芸州広島へと赴きます。このあたりの近藤の動向は、11/29・30のツアー「政治家近藤勇と四境戦争」で追いかけてみます。

さて、近藤の2度目の芸州入り。その期間について、過去の研究では慶応2年1月27日から3月12日に帰京とされてきました。が、ツアーに向けての調べの中で、4月であったことが知れる史料を数点、中村武生先生が確認されました。

八王子同心土方勇太郎の弟健之助の従軍日記によれば「**尤加古川宿より壱里程向ひ二而近藤先生二行逢広島の様様承り候**」とあり、新選組幹部の井上源三郎の兄で同じく千人同心として長州征討に従軍した井上松五郎の日記に「**十一日明石出立二て、拙者義陣側より少々先に罷出、致通路合之宿近藤(勇)先生二逢、長防之様様聞候処、**」とありました。これらのことから近藤は4月11日には播州加古川かいわいにいたことが分かります。これらは翻刻もされ「史料集」として世に出ているものですが今まで見落とされ、近藤の帰京日の検証もなされていません。そして、なぜ3月12日帰京で定着してしまったのでしょうか。また、近藤がいったん帰京したのち、再度西下した可能性はないのかなどツアー中に中村先生にご見解をお聞きし、解説いただきます。

土方健之助が書き残した近藤と「逢」った場所、「加古川宿より壱里程向ひ」がどこであったか、このあたりを中村・朝山コンビと皆さんと一緒に探るのが11/29の「前哨戦」の大きな狙いです。土方健之助が4月12日に宿泊した姫路城下町の旅館町も探してみましょう。これらの場所の推定はもちろんですが、近藤が長州征討に対してどのような見込みを持ち、それを長州との戦いへと向かう郷里の仲間たちにとどのように伝えたかなども考えます。近藤が井上松五郎や土方健之助と会った前日の4月10日、となりの備州では、長州第二奇兵隊による倉敷代官所襲撃事件があり、続いて13日には総社浅尾藩陣屋襲撃事件が起こされるなど、広島へと至る西国街道は騒然としていました。

せっかくの播州訪問の機会、新選組局員・河合耆三郎の生誕地や、西洋医学の日本への伝道者・シーボルトの訪問地、そして新選組が西本願寺屯所として使っていた建物が寺の本堂として残る(移築)亀山本徳寺なども訪問します。